

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>(1)道徳教育の充実 ・高校生として望ましい規範意識、生活習慣を確立する。 ・自己肯定感を高めるとともに、他者に対する思いやりなど、周囲と豊かな人間関係を構築することのできる豊かな心を育む。 (2)キャリア教育の充実 ・社会的問題に関心を持ち、社会の一員であることを自覚させる。 ・探究活動をおして、社会的問題の解決に向けて必要となる能力を育成する。 ・将来の生き方を前提とした進路指導を展開する。 (3)高い志を有し、学ぶ意欲を向上 ・将来の生き方を考えさせることで主体的に学ぶ姿勢を涵養するとともに、社会問題の解決に向けて必要となる確かな学力を育成する。 ・授業をおして論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力を高める。</p>	<p>今年度の重点目標</p>	<p>(1) 基本的生活習慣の確立 (2) キャリア教育の充実 (3) 主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上 (4) 情報収集、情報発信の充実</p>
---------------------------	---	-----------------	--

年 度 当 初				評 価 結 果 (9月中間反省)			
評価項目	具体的項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
基本的生活習慣の確立	①コミュニケーション能力を向上させる	・きちんと立ち止まっでの挨拶は、外部から好評を得ている。 ・挨拶はほとんどの生徒ができています。 ・授業や集会での聴き方、積極的な発言など場面に応じた行動がとれない生徒が見られる。	・自然に自分からさわやかな挨拶ができる。 ・授業や集会などで顔を上げて、きちんと話を聴くことができる。 ・TPOを意識した行動や、積極的に自ら発言をすることができる。	・積極的、意欲的な行動や姿勢をとった生徒を褒めて育てる。 ・生徒会を中心に、生徒同士で挨拶をかわす機会をより増やす。 ・礼儀を正すことがコミュニケーションの基本となることを、さまざまな場面で生徒に伝える。	・今年のS1生には自分から挨拶できる生徒が多い。保護者アンケートでもS1保護者は89%と高く、学校全体でも83%の評価である。 ・生徒アンケートでは、72%の生徒がコミュニケーション能力が高まったと感じており、特にS3生は82%と高い。 ・授業や集会での聴く姿勢はよい。積極的に発言できる生徒も徐々に増加している。 ・1学期に生徒会執行部による朝の挨拶運動を実施した。	B	・挨拶することの意味等をHR等で繰り返し話すなど、さわやかな挨拶ができるよう継続して指導する。 ・生徒会新執行部を中心に、生徒同士で挨拶運動を行う。
	②時間の使い方の意識を向上させる	・目標を設定し、予習・授業・復習の良いサイクルの確立に努め主体的に取り組む土壌ができてきた。 ・学習習慣の定着は生徒による個人差が大きく、教科的にも偏りがある。部活動に多くの時間を費やしている生徒の中には課題や諸テストの準備に十分な活動ができていない生徒もいる。	・四点固定を意識し、基本的生活習慣の確立ができています。特に授業を中心に見据えた、家庭学習(予習・復習)の時間の確保、習慣化ができています。 【家庭学習時間目標】 S1・2・2時間以上の生徒が70%以上 S3:総体前2時間以上の生徒が70%、総体後5時間以上の生徒が50%以上 ・課題の意味を理解し、課題提出状況が100%となっている。	・引き続き「生活の軌跡」を活用し、面談を通して家庭での学習習慣の指導を行なう。 ・授業時に予習状況の確認を行う。また課題提出の状況、内容チェックなどの取組を継続し、未提出者への指導を徹底する。	・S3は4月当初から着実に学習時間を増やしており、総体後1日5時間以上が50%以上の目標に近づいてきた。 家庭学習が2時間以上95% 5時間以上7月25%、8月39% ・スタディーサポートの検査では復習を行っている生徒の割合はS1:97.5%、S2:96.6%であるが、S1・S2の家庭学習時間は一定せず、検査前を除いて目標値をクリアできていない。S1:57%、S2:41% ・課題の提出の徹底、内容チェックの取組は継続して行っている。	C	・家庭学習が習慣化されていない生徒を中心に、担任や教科担任が面談を行い、家庭学習を促す。 ・課題は時間をかけじっくり取り組めるように内容を工夫する。 ・課題の提出状況を把握する。
		S1:欠席や遅刻のない生活をしようと自己管理に努力している。 S2:遅刻、欠席は通院を除きほとんどない S3:通院、体調不良等による遅刻を除けば遅刻はほとんどないが、時間ぎりぎりまで登校する生徒がいる。 ・集会等の集合状況はよいが、整列に関してはまだ十分とは言えない。チャイムが鳴った時点で授業の準備ができていない生徒は増えた。	・登校後、各教室で静かに読書や本日の準備を行う。 ・通院以外の遅刻の延べ数は年間35回以内。(不登校傾向の生徒は除く) ・集会等では、時間前には集合し、整然と整列が完了している。 ・時間の有限性を理解し、学習時間を確保する。	・生活の軌跡を利用しながら時間の使い方を確認し、面談等をして時間を意識した生活を促す。 ・生徒会活動と関わりを持たせながら自主的な行動ができるように、教員が声かけをする。 ・チャイムと同時に授業を始める。	【S1】遅刻回数は、延べ12回以内を目標にしているが、現在8回。予鈴までの着席を指導しているが、時間ぎりぎりに登校する生徒が数人いる。 【S2】遅刻回数は、延べ27回。特定の生徒が遅刻している。授業開始前、静かに授業の準備をしている生徒が増えた。 【S3】遅刻回数は、延べ16回。年度当初より少しずつ減ってきた。遅刻ぎりぎりの生徒が固定している。 ・集会等の集合について、時間内の集合は出来ているが、まだ指示しないときちんと整列できない。	D	・ギリギリの行動では見通しを持った行動ができないことをその都度伝え、個別指導も行う。 ・朝勉強をする習慣やステージの雰囲気を作る。(プリントで朝学習) ・継続して正門、生徒玄関前での声掛けをする。 ・保護者への連絡を密にし、家庭の協力をお願いする。また、遅刻した生徒にはその都度指導する。
キャリア教育の充実	①チャレンジグループ活動の計画的な実施、及び内容の充実	・社会人講師等の講演により、生徒の進路意識が高まった。 ・フィールドワークで実際に現場(地域)を訪れて調査する生徒も増えた。 ・昨年度採用したチャレンジノートは利用しやすく、記録の保存として活用できた。 ・チャレンジグループ活動で取り組んだ研究テーマと結びついた進路を選択した生徒の割合は約8割である。 ・社会に対する関心が希薄なため、自ら進んで社会と関わろうとせず、個人研究もネットワーク上の情報を写すだけという生徒も一定数いた。	・社会に対して関心を持ち、自ら気になる課題、解決の探究テーマを設定してフィールドワークなど適切な調査活動や情報収集を行ない、論理的・合理的な結論を出すことができる。 ・チャレンジグループ活動をおして、自らの進路目標を明確にし、将来、社会貢献しようとする態度を身につけ、問題解決能力を養う。	・過去のチャレンジグループ活動の情報を整理し、年度当初の活動がスムーズに行えるようにする。 ・個人探究の具体的なテーマをS2の早期に設定し、長期休業中を利用した活動を計画させる。 ・チャレンジノートを有効活用し、様式の充実や記録の工夫を図る。 ・研究テーマに応じた、調査方法、情報収集の仕方について、適宜指導し、完成度の高いレポート作成に向けた工夫を行う。 ・上級学校における学びや職業の選択と結びつけ、将来につなげる取組とする。	・S2は個人探究のテーマ設定を行っているが、その状況には個人差がある。 ・どのステージもチャレンジノートは有効活用している。 【S3アンケート結果より】 ・97%を超える生徒がチャレンジグループ活動等の探究活動によって、知的好奇心が深まったと評価している。 ・89%の生徒が自身の進路目標に対して好影響があったと評価している。	B	・S2はテーマ設定からフィールドワークを含む個人探究への切り替えができるように、過去の探究や調査を参考に、グループ内で助言や指導を行う。 ・進路目標が明確でない一部生徒に個別指導を行う ・フィールドワーク関西の事前準備時間が少ないので、時間配分や事前計画をS1に伝達し、来年度も見通しを持った取り組みとする。
		・ステージ主任間で連携を図り、3年間を見通した活動の流れを体系的に整理している。 ・各グループの担当教員が3年間を意識して活動を行っており、生徒の取組も体系化されてきた。 ・グループ活動内の連携は少しずつできてきたが、全体で共有する場の設定が少ない。 ・チャレンジグループ活動の意義やねらいを年度当初に説明したが、自己研鑽している生徒は少ない。	・3年間を通した指導目標・方法・計画を担当教員が共有し、運営できている。 ・各グループの動きがすぐに把握できるように、昨年度の資料などが整理できている。	・ステージ主任会で各ステージの状況を確認し、スムーズな運営とする。 ・各分野ごとの担当教員の情報交換・連携を密にする。 ・職員会議等の研修の時間を活用して、チャレンジグループ活動の運営上の課題を明確にし、解決する。 ・研修旅行には次年度のメンバーを加え、研修終了後に時期を逃さず引き継ぎを行う。 ・キャリア教育全体計画を熟読し、ねらいを明確にする。	・各ステージ主任会で大きな行事ごとの連携を図った。講演会講師選定などの細かなノウハウの蓄積や記録は不十分である。 ・S3の各分野での活動は計画的にできた。 ・今年度から報告書を全生徒・教員に配布して好評である。 ・次年度のフィールドワーク関西をスムーズに行うために、現S1主任の同行を計画している。	C	・3年間を見通した計画と記録を保存して、引継ぎを行う。
		・フィールドワーク関西の訪問先、研修内容や、研究テーマに関する情報収集などが図書館でまとめてあり、チャレンジグループ活動全般で活用されている。 ・県内の情報発信・提供の取組みや文化活動についての視野を広げるため、県立図書館・博物館・出版事業者等の見学を行っている。 ・展示や講座を通じて、地域や進路に関わる情報を提供している。 ・図書館での一人あたりの貸出数が15.4冊である。	【図書館活用】 ・生徒が知識を習得するために、自主的に読書をしている。 ・生徒の進路意識や地域に対する関心を高めるため、適宜情報を提供している。 ・図書委員会を定期的に開催し、展示内容や展示物を工夫している。	【図書館活用】 ・フィールドワーク関西研修の内容充実のために、訪問先等の情報収集を更に進め充実を図る。 ・図書委員会を月1回開催し、生徒の意見を取り入れてより効果的な図書館活動を工夫する。 ・チャレンジグループ活動コーナーの図書の充実を図る。	・チャレンジグループ活動コーナーを設置し、各グループの推薦図書やフィールドワーク関西の関連書籍を架装した。 ・図書委員が「図書館だより」に掲載する本の紹介記事を執筆し、購入図書の選書や高校生クイズのキャッチコピーを作成した。 ・県立図書館や博物館、公文書館の見学を行い、情報発信・提供の仕方について学んだ。	B	・図書館だよりを活用して各教員が適宜、チャレンジグループ活動や進路選択、学問に関わる推薦図書を生徒に紹介する。 ・今後の図書委員の活動として、中部地区図書委員交流会への参加や冬休み中の蔵書点検を実施し、展示の工夫・図書館の有効活用を図る。
		S1:キャリア教育の目的を理解し、チャレンジグループ活動に積極的に取り組もうとしている。 S2:4月から各グループに分かれ、チャレンジグループ活動における探究の手法としてのフィールドワーク関西研修に向けて準備をしている。 S3:S3では既に個人研究に取り組んでいるが、進捗状況に差がある。 ・積極的に図書館を活用している。	・講演や体験及び各活動を通して、具体的なビジョンを持ち、社会や自らの関心に対する理解を深め、その後の学習意欲や進路意識を高めている。 ・自分で体験・調査・探究したことなどをまとめ、相手に分かりやすく伝えるようなプレゼンができる。	・教員が各分野に対する研究をし、生徒に対して適切な指導をする。 ・各生徒に、感想や記録を取らせてチャレンジノートに残し、成果や課題を明確にさせる。 ・プレゼン能力講演会を開催し、まとめ方や発表方法に関わる技能を向上させるとともに、S3次には個人研究をレポートの形でまとめさせ、成果や今後の課題等を明確にする。	【S1】すぐに感想や成果・課題をチャレンジノートに記入して提出している。 【S2】チャレンジグループ活動の年間計画に沿って計画的に活動できた。フィールドワーク関西の研修先選定も年度当初から取り組み、夏休み前には決定し、夏休み後には研修先の研究に取り組めた。 【S3】全員が論文形式にまとめ、探究の成果を形にすることができた。また、発表もよくできていた。	B	【S1】感想の中から、今後の指導の参考になるものをピックアップして、SHRなどで伝える。 【S2】日常の学校生活と並行して計画的に準備していく。研修後のまとめ学習においてまとめ方、発表方法を工夫しながら個人探究に繋げていく。 【S3】活動報告書に掲載し、次年度へつなげる。
	S1:ボランティア活動に参加して、地域や社会の状況を知る事により、貢献しようという気持ちを持っている。 S2:ボランティア活動に、自主的に参加している生徒が多い。 S3:ボランティア活動には多くの生徒が、明確な目的意識を持って参加している。 平成28年度のボランティア参加者は、全校で延べ184名	・ボランティア活動を自己研修の場とし、地域に対して貢献する気持ちを持つ。体験を元に学校行事などに積極的に取り組めるようになる。 S1:ボランティア活動に全員が年1回以上参加し、社会の中での自分のあり方を考え課題について自分なりに方策を考えている。 S2:ボランティア活動を自己探究の手法ととらえ、チャレンジグループ活動とリンクしていく。 S3:ボランティア活動に参加することで地域貢献をする。	・ボランティア活動に行く事前指導を行い、参加して学び、気づき考えたことを記録し、ホームで報告する。 ・特に夏休み中のボランティア活動への参加を奨励する。 ・講演会やステージ集会、学年通信を通して、生徒が地域貢献・社会貢献に積極的に関わる態度を養い、人間の生き方について考えさせる。 ・チャレンジノートを積極的に活用させる。	【S1】約75%がボランティア活動に参加し、活動を通して気づいたこと・考えたことをしっかり記録している。 ・紙面上での報告はできているが、ホームでの発表をする時間が確保できていない。 【S2】校長先生による自己探究としてのボランティア活動の講演会を実施した。 【S3】ボランティア活動、体験学習、オープンキャンパスなど多くの生徒が校外活動に参加し、自己探究を行っている。	B	【S1】SHRで数人ずつでも報告が出来ないが検討したが、時間がたりないので、学期末等で時間を確保する。 【S2】地域貢献活動や個人的校外学習等に参加して、自ら学んだことや気づいたことを振り返るために報告書にまとめさせる。 【S3】定期的に集約を行って活動状況を把握し、必要に応じて活動を促す。	
	・生徒会活動では、生徒が主体的に活動できるシステムが機能しており、生徒会執行部を中心に頑張っている。 ・生徒会活動や部活動の経験を活かして、進路実現をめざしている生徒が多い。	・生徒会活動を通して、生徒が責任を持って主体的に取り組むことに喜びや達成感を得ることができる。 ・生徒会活動を通して、生徒の社会貢献や地域貢献への意識が高まり、進路実現に向けた意欲と結びついている。	・生徒主体の運営や活動を成功させるために、企画・運営のマニュアル化、準備、練習を充実させる。 ・生徒アンケートで、生徒会活動への評価項目を設ける。	・クラス数が減った状況でも執行部を中心として生徒会活動に頑張っている。西高祭や球技大会など、生徒の主体的活動がなされているが、生徒アンケートでの評価は昨年より少し低下した。79.9%→75.3% ・西高祭では地域の方にも喜んでもらえるチームパレードなどの企画をたて、好評だった。	B	・生徒会活動や部活動での経験を、今後の自分の進路実現につなげる指導を行う。 ・後期生徒会役員に自分達の生徒会活動や学校生活について、自ら学んだことや気づいたことを振り返るために報告書にまとめさせる。 ・西高祭では地域の方にも喜んでもらえるチームパレードなどの企画をたて、好評だった。	

評価項目	具体的項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上	①アクティブラーニングの視点を取り入れた授業の工夫	・十分とは言えないが、授業を大切にしている生徒の意識が高まり、教員の設定した目標に主体的に取り組む土壌ができつつある。 ・アウトプットの機会を盛り込み、工夫ある授業が増えてきている。	・生徒自身が考え、表現する機会をさらに増やすなど生徒の自発性、積極性を引き出す授業を行う。 ・生徒自らが考え表現し、意見交換することで、深い学びを実践している。 ・客観的な思考及び判断ができる。 【生徒授業アンケート】関連項目1・2・5については「はい」の回答が80%以上または年間で10%以上アップ。3・4については、「はい」を年間で10%以上アップ。	・校内研究授業を年3回(6教科)実施し、授業後には教員全員参加の研究協議を行って工夫した点や成果についての情報共有を行い、得たものを授業で活用し、生徒に還元していく。 ・アクティブラーニング研修会を年2回実施し、協働・協調学習の視点による工夫を取り入れた授業実践につなげる。 ・調査の問題も「思考」「判断」「表現(論述)」を意識した出題につとめる。	・校内授業研究会を、講師を招聘した研修会とからめて前期に1回実施し、情報共有を行った。授業改善に向けた研究テーマを全職員で共通認識し、後期2回の授業研究会に向けて準備を進めている。 5月12日(実施) 数学、現代社会 11月10日(予定) 理科、国語 2月(予定) 英語、保健体育 ・調査の問題に関しては、春よりも学習意欲と学力を問う問題の出題に心がけ、出題を工夫している。	B	・引き続き校内研究授業や、アクティブラーニングの視点を取り入れた実践事例を参考にし、取り入れることのできる部分から積極的に取り入れ自らの授業改善につなげていく。 ・思考力、表現力を問う問題の出題を継続するだけでなく、評価(その振り返り)をしっかりとおこない更に工夫改善につとめる。 ・ワーキンググループの提案を基に学校全体で同一テーマで取り組む。
	②学ぶことの意味を理解し、主体的に学ぶ意欲を高める	S1: 部活動と勉強との両立に悩みながらも、授業を大切に学ぼうという思いが強い。 S2: チャレンジグループ活動等を通して、学ぶことの意味についての理解が徐々に高まりつつある。 S3: オープンキャンパスに参加することで進路意識が向上した。チャレンジグループ活動の学習を活かして、進路決定・進路実現につなげようとする生徒が増えつつある。	・将来に対し明確なビジョンを持ち、授業や家庭学習に意欲的に取り組んでいる。 ・隙間時間を自主学習に活用している。 ・学校内外の進路行事(講演会やオープンキャンパス)に積極的に参加している。	S1: 学習・生活の軌跡を利用して、反省した点を次に活かすためにどうしたらよいかをしっかりと考えさせ、PDCAサイクルを充実させる。 S2: 学習及び内容の充実のために授業力向上に努めると共に、個別の面談を行い、小まめな指導を行う。 S3: 教員からオープンキャンパスの勧めやプレゼン型の進路指導を行い、進路目標に関する生徒の視野を広げ、早期から具体的な進路目標を明確にさせる。	【S1】学習と部活動の両立が困難な状態の生徒もいるが、自分はダメだと開き直ったり諦めたりしている生徒はいない。まだ優先順位を考えた取組ができないので、「日々の課題に追われている」状態を自分で作っている。 【S2】家庭学習時間をみるとまだ十分とはいえないが、スターサポートの検査では、春よりも学習意欲と学力が伸びてきた。 【S3】面接週間以外にも適宜面接を実施し、進路指導を行った。 ・自分の進路志望にあわせて大学や短大等のオープンキャンパスに参加するなど、進路意識の高まりが見られる。	B	【S1】・PDCAのCAを充実させるために、「どうしたらよいか」各自が自分の生活に合わせて振り返り考える時間を設定し実践させる。 【S2】・進路希望と実際の生活の軌跡をリンクさせながら面談する。 ・1年次の学習内容が不十分な生徒には復習する時間を確保させる。 ・英語に関しては中学生レベルの内容からの学び直しが必要な生徒も多数いるので、個別の支援をする。 【S3】10月以降多くの模試が実施されるので、各模試に対する目的意識をしっかりと持たせるとともに、志望校等について面談を継続し、進路実現を図る。
	③校外模試成績を含めた学力向上	S1: 学ぶ意欲は高く、与えられた課題に対して熱心に取り組んでいる。 S2: S1からのバイオニアホーム研修を通して、生徒会活動や各自の学びに対する意識の高揚がみられる。 S3: 公立鳥取環境大学での講義、岡山操山高校のリーダー生徒との交流などバイオニアホーム育成の企画により生徒のリーダー性や学校牽引役としての意欲が向上した。ただし、バイオニアホームの取組内容や意図が他ホームに伝わっていない。	・バイオニアホームとしての自覚を持ち、学校活動の意義や社会に対する理解が進み、学校のリーダーとしての資質を獲得している。(主体的・自主的な学習、チャレンジグループ活動に積極的に取り組んでいる。) S1: 学習や探究に対する意欲が高く、ステージの核となっている。 S2: 見学や体験を通して、社会や自らの関心に対する理解を深め、その後の学習意欲や進路意識を高める。特にバイオニアホーム研修ではステージや学校のリーダーとして能力を発揮する。 S3: 学校におけるバイオニアとしての自覚を持ち、主体的に学習や学校行事に取り組む。	・校内の問題点や課題について問題提起し、生徒が議論する場を設ける。 ・様々な研修を実施し、その成果を発表する場を設定する。 ・バイオニア企画の情報を校内外に発信する。	【S1】・「国際高校生フォーラムと同じテーマで各自が論文を書く」という取組は、物事をじっくり考え表現する良い機会となった。また、他校生の発表を聞いてよい刺激を受けた。 ・日常生活の中で、学校のリーダーとしての自覚が低い生徒がいる。 ・10月31日に公立鳥取環境大学を訪問して、模擬授業や英語村研修を計画している。 【S2】生徒会長、副会長、学園祭実行委員長を務めるなど、バイオニアホームの校内におけるリーダー的意識が高まっている。シンガポール研修において、率先して英語・マレー語の習得や異文化理解について他の生徒をリードしたり、フィールドワークイン関西における他校との交流準備に意欲的に取り組んでいる。 【S3】学校祭では多くの生徒が実行委員を務めリーダーとして頑張った。 ・放課後学習会でも多くの生徒が残り、他ホームに良い刺激を与えている。	B	【S1】一人になる生徒の面談を行い、バイオニアホームの一員としての自覚を高め、生活の見直しをさせる。 ・新聞を読んで思ったことを日常的に発表する機会を作る。 ・SHRなどでS2やS3の生徒と交流し、刺激し合う。 【S2】バイオニアホーム研修については、担任・生徒の緻密な連携のもと、計画的な準備をしていく。 【S3】S3としてS1、S2の生徒に意欲的に学ぶことについて自分の体験を元にしたアドバイスを行う。 ・英字新聞の効果的な活用方法を模索する。
情報収集、情報発信の充実	学校の魅力、生徒の活動状況を積極的に情報発信する	【ホームページの運用】 ・更新が特定職員に偏っている(平成28年度の発信件数：160件)。 ・画面の修正・変更が必要(ホームページ上に廃止された部が残る)。 ・アクセス数は増加している。 (平成28年4月8日～同29年4月1日のアクセス数は約204,500件、それ以前の総アクセス数は、約228,000件)。 【季刊倉西・倉吉西高通信の刊行】 ・時期をずらして、各年4回刊行している。 【ミッタシステムの運用】 ・S2・3生保護者の登録率が、それぞれ92%、74%であり、休校や災害時等の連絡ができない保護者がいる。	【ホームページの運用】 ・生徒の活動や必要な情報が適宜、掲載されている。 ・見やすく、わかりやすい画面になっている。 ・更新件数を300件とする。 ・項目を見直し、どの項目も年度内に更新する。 【季刊倉西・倉吉西高通信の刊行】 ・保護者に学校並びにPTAの活動や方針等を適宜、伝える。 【ミッタシステムの運用】 ・全保護者が登録し、漏れなく緊急連絡を行うことができる。	【ホームページの運用】 ・担当した行事、部活動の様子を職員が速やかに原稿を作成し、管理職のチェックを経て、掲載する。 ・画面の修正・変更を、可能な範囲で行う。 【季刊倉西・倉吉西高通信の刊行】 ・『季刊倉西』では学校から保護者宛のメッセージを、『倉吉西高通信』ではPTA活動の紹介と参加呼びかけを主とした紙面とする。 【ミッタシステムの運用】 ・未登録の保護者に登録を呼びかける。	・7月校外模試結果を基に、各ステージ目標偏差値を決定した。(目標加筆部分参照) ・拡大ステージ会への関心が高まり、出席率が揃っている。 ・拡大ステージ会を通して、ステージ全体の成績の把握が共通理解されてきた。 【S1】7月模試の3科合計の全国偏差値が51.5で過去最高であった。 【S2】S2の7月進研の結果はS1時に比較して、偏差値60以上、50以上の層が若干増加し、45以下の生徒が少し減少した。 【S3】センター試験出願率が98%と高く、ステージ全体で取り組む姿勢ができています。模試対策では過去問題を含めて取り組んだが、まだ各教科に克服すべき部分がある。	C	【S1】模試前後の対策をさらに充実させる。 ・年度末の成績を設定目標値と比較・検討し、次年度の目標を明確にして、来年度への継続的な指導を図る。 【S2】S1からの総復習や5教科型への幅広い学習の必要性を継続して声掛けし、家庭学習時間を確保させる。 ・2月マーク模試を今から意識させて取り組む。 【S3】各模試の目標や狙いをはっきりと伝え、事前の対策を計画的に取り組ませる。 ・10月から朝の小テストに理科と地歴を実施する。 ・放課後演習や学習会に積極的に参加させる。
		【中学生体験入学・中学校での説明会】 ・体験入学では、2日間で350名以上が参加し、「参考になった」の回答が99%以上(H28年度)。 ・中学校での高校説明会で、本校生徒による発表が好評であった。	【中学生体験入学・中学校での説明会】 ・参加者の満足度が90%以上 ・中学生や保護者が倉吉西高の情報を持っている。	【中学生体験入学・中学校での説明会】 ・チャレンジグループ活動発表会のプレゼンを取り入れるなど、生徒の情報発信力を高める機会として有効に活用する。 ・ホームページの中学生へのメッセージを更新する。	・体験入学では、2日間で370名以上が参加し、「参考になった」の回答が99%以上であった。 ・チャレンジグループ活動発表会のプレゼンを取り入れ、生徒の情報発信力を高める機会として有効に活用した。 ・ホームページで「中学生体験入学」の開催案内と、開催日2日間の様子を紹介した。 ・説明役の人選についても生徒会執行部と西高祭実行委員会からバランス良く選ばれており、どの生徒もやりがいを感じていた。	A	・「声が小さい」との意見が寄せられていたので、ハンズフリーマイクを導入するなど工夫して、生徒が説明しやすいように改善する。 ・本校生徒の情報発信力を高める機会として今後も有効に活用する。 ・生徒による学校説明やチャレンジグループ活動のプレゼンについて取組を記録に残し、来年度に引き継ぐ。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し

[90%] [80%] [60%] [40%] [30%]